

市民アートサポート I CAN OF 第30回企画展
『笹岡啓子——種差 ninoshima 展』

2015年
8月22日(土)~9月13日(日)
10:00~18:00 (最終日のみ閉館16:00)
計21日間/入場無料
休館日: 8月31日(月)・9月7日(月)

八戸市美術館

企画・主催: 市民アートサポートICANOF (代表 米内安芸)
キュレーター: 豊島重之
共同主催: 八戸市美術館 (tel. 0178-45-8338)
協賛: (株)キタムラ、フォトセンター窓門、
サンフランド、studio hypnos、ダンスバリエリセ
後援: Be FM、東奥日報社、デーリー東北新聞社、
八戸市文化協会、八戸学院大学、
八戸学院大学 八戸学院短期大学地域連携研究センター

【オープニングパーティ@八戸グランドホテル】
8月22日(土) 18:00~

出品作家やトークゲストの皆さんを囲んでの
和やかな懇話会です。会費 6,000円。
参加ご希望の方はお気軽にお問合せください。

問合せ: ICANOF
090-2998-0224
icano18@gmail.com, icanof.parallel.jp
031-0022 八戸市古常泉下14-18

- 8/22 Sat @2F 講義室 (聴講無料)
- 14:00~ ギャラリートーク [1] 倉石信乃
「孤島論——似島の位置」
 - 15:00~ ギャラリートーク [2] 東琢磨
「ササオカ・ノワール」
 - 16:00~ トークセッション [3] 笹岡啓子・鶴飼哲・東琢磨・倉石信乃
「写真の口・写真の鼻/タネサシからニノシマへ」
 - 18:00~ オープニングパーティ@八戸グランドホテル
- 8/23 Sun @2F 講義室 (聴講無料)
- 13:30~ 上映会+トーク [4] 佐藤英和・東琢磨・鶴飼哲
「裸性を着た/脱いだ、瞬膜のスクリーン」
 - 14:30~ トークセッション [5] 鶴飼哲・笹岡啓子・倉石信乃・東琢磨
「〔動物である〕ことを学ぶ、終に〔仮題〕」



東 琢磨 HIGASHI Takuma

音楽・文化批評。広島県生まれ。在住。
ヒロシマ平和映画祭実行委員、連続ティーチ・イン沖縄実行委員、成蹊大学講師などを勤め、近年は東北の被災地での講演にも招かれ、日本中を飛び回っている。
主著に『全-世界音楽論』(2003)、『国境を動揺させるロックン・ロール』(1998)、『ラテン・ミュージックという「力」』(2003)、『ヒロシマ独立論』(2007)、『ヒロシマ・ノワール』(2014) ほか多数。



鶴飼 哲 UKAI Satoshi

フランス文学・思想。一橋大学大学院教授。
主著に『ジャッキー・デリダの墓』(2014)、『主権のかたがで』(2008)、『応答する力』(2003) ほか多数。
訳書・共訳書にジュネ『恋する虜』(1994)、『シャティエラの四時間』(2010)、『公然たる敵』(2011)、デリダ『盲者の記憶』(2003)、『生きることを学ぶ、終に』(2005)、『ならず者たち』(2009)、『動物を遡る、ゆえに私は〔動物である〕』(2014) ほか多数。



倉石信乃 KURAISHI Shino

写真史・近現代美術史。明治大学大学院教授。
横浜美術館学芸員時代に「ロバート・フランク ムーヴィング・アウト展」(1995)、『中平卓馬 原点復帰—横浜展』(2003) ほかキュレーション。
著書に『反写真論』(1999)、『スナップショット』(2010)。
共編著に『明るい窓: 風景表現の近代』、『失楽園: 風景表現の近代』ほか。
論者「不鮮明について 松重美人の写真、最初の1枚」が、2015年3月モレキュラー〈スヴァールバル〜種子の方舟〉公演(青森県立美術館主催)に引用される。



【北島敬三 2013】より © SATO Hidekazu



【矢野静明 2014】より © SATO Hidekazu



佐藤英和 SATO Hidekazu

映像ディレクター。京都府生まれ。
主な映像作品に『ICAN OF ICANOF (イカノフの缶詰)』・『北島敬三 2013』・『矢野静明 2014』ほか。
1998年、瀬戸内海・佐木島での「モレキュラー演劇ワークショップ」を撮影、そのドキュメント上映を実現。
2015年、爆心地広島と1万人もの被爆者が収容された離島「似島/にのしま」の、70年後の雷鳴と驟雨を遡る。



佐藤英和 『Itanesashi / ninoshima 2015』 連作より © SATO Hidekazu



豊島重之 TOSHIMA Shigeyuki (ICANOF)

モレキュラー演出家・美術展キュレーター。
主な舞台に『Ohio / Catastrophe』(シアターラム)・『Inori-shiro』(座 高円寺)・『Decoy』(沖縄県立美術館)・『Inno-maii bis』(八戸市美術館)・『Svalbard Vault: Vehicle for Seeds』(青森県立美術館) ほか。
主な編著・共著に『飢餓の木2010』・『ドゥルーズ 千の文字』・『種差の世紀/種差四十四連図』ほか多数。

2013年三陸復興国立公園指定記念「北島敬三〜種差 scenery 展」、2014年「矢野静明〜種差 enclave 展」に引き続き〈種差シリーズ〉第三弾! 戦後70年のねじれた時空に黒々と「PARK CITY」を焼き込んできた第三の射手、笹岡啓子が放つ魔弾の行方は?

むしろ「PARK CITY」とは、狭義には平和公園都市ヒロシマのことだが、いまや復興公園都市フクシマをも指すようになったばかりか、限界集落をうむまわる消滅都市パニックの煽りをうけて、このくにの街という街がこぞって「PARK CITY」へと「レミング=地走り」しつつあるかのようだ。そこは無人の桃源郷? それも随処にコンビニと監視カメラが完備した無人の?

見過ごしてはならない。笹岡の「PARK CITY」には、いつも画像のダークサイドへ、「写真の口」へと姿をくらましていく群影が写し込まれているのを。とはいえ、それが出口か入口かを、口は語らない。いっさい黙して語らないその口が、見るものを捉えて離さない。言葉を発しない身ぶり自体が裸性(らせい)の試練を発してくる。人称性を脱いだ「非人・称」の、家畜ならぬ鬼畜の、いうなれば、動物に「まなざ」される試練。人々が見ない、世界が見ない、他者が(おそらくは神も)見ない、そこで初めて、写真の口が見る?

厄災からの復興/復興と称する厄災。私たちの〈戦前・戦後〉はヒロシマから「まなざ」されるとともに、フクシマからも「まなざ」されている。その眼差しの光源はどこに見いだされるのか。三陸の浜づたいの北端に位置する風光明媚な種差岩礁。その種差を拠点とした鳥瞰図絵師 吉田初三郎が、原爆投下後の広島を歩き廻り、何日も聞き書きして仕上げた『HIROSHIMA』連図。現在、その下絵の一部は広島平和記念資料館に収蔵されている。そこにタネサシからヒロシマを、日本というシマジマを眺望しうる息も絶え絶えな視角・アングルが、いわば「瀕死角・急死角」が息を殺していたとは。

風光明媚な安芸小富士(あきのこぶじ)で名高い広島湾内の離れ小島「似島/にのしま」。富士に「似る島」は、古来より異船の遠見・潮見の要衝ゆえ「看る島」であった。荷継ぎ港「荷の島」には、いまも旧陸軍検疫所・被爆者収容・遺体安置所の痕跡が生々しい。古名「ニホ島・乳穂シマ」。豊稔多産のニホ神を祀った海難慰霊・戦勝祈願の荒神社と、イチキシマ弁財天を祀った無嶋神社との照応。ニノシマはあまりにタネサシの風致と似てはいないか。外方(げぼう)の麻の笠の口、を引くまでもなく。似島の「馬匹(ばひつ) 焼却炉」遺構が、種差の「馬捨て場=地獄穴」伝承と人知れず響き合っていたとは。

TOSHIMA Shigeyuki (ICANOF)

タネサシと名ざされるその前夜、そこはニノシマと呼ばれていたらしい

口の島、口の荒ぶる馬の島、馬の眼に火柱が二度走る島、二の島——

笹岡啓子

種差

NINOSHIMA



©SASAOKA Keiko



©SASAOKA Keiko



©SASAOKA Keiko



菅岡啓子 SASAOKA Keiko
 写真家。広島県生まれ。
 林忠彦賞受賞の「Remembrance」連作や東京都写真美術館「この世界とわたしのどこか」展や青森県立美術館「種差 よみがえれ 浜の記憶」展などで、いま最もアクチュアルな軌跡を刻む写真家。
 主な写真集に「PARK CITY」(2009)・「EQUIVALENT」(2010)・「FISHING」(2012)ほか。
 2012年より被災地の写真を主とした「Remembrance」(全41号)を刊行。
 受賞歴：2008年VOCA展奨励賞・2010年日本写真協会賞新人賞・2012年さがみはら写真新人奨励賞・2014年第23回林忠彦賞。

©SASAOKA Keiko

- 1F ▶ 菅岡啓子《Century of the Shore》スチール・プロジェクション
- 2F ▶ 菅岡啓子《PARK CITY》をメインとした写真展示
- 3F ▶ 佐藤英和《taneshashi/ninoshima 2015》常設上映

▶関連書「photographers' gallery press no.12(爆心地の写真 1945—1952)2500円+税。
 会期中、受付にて、本展テーマを導いた「爆心地の写真をめぐる論考」が収録された貴重な一冊を紹介。